



「ことのは」

「発行者」龍野東中学校 校長 日下博文

第46号(7月号)
令和8年7月21日



日々小論 夏は宿題

令和七年八月四日の神戸新聞から

夏は宿題。自由研究は言うまでもなく、読書感想文もまたよい。絵日記などを一つ、二つ書くのも趣深い。

などとはとても思えない。人はみな、夏休みの宿題を巡る苦労話を一つは持っているはず。

夏休みが純粋に楽しかった夏は、どれだけあっただろうか。

「うちの中学校は他の学校に比べたら、夏休みも宿題がかなり少ないと思います」

先日、西播磨地域にある中学校の校長先生がそう紹介しているのを聞いた。

いわく、約三十年前と比べ家庭や社会は複雑化して、子どもたちは日頃から高いストレスがかかった状態にある。ストレスをコップの水に例えれば、現代は平時からあふれそうな状態の子が多いのだという。大人が以前感覚で「これぐらいは乗り越えられる」とストレスをかけたが、その状態を放置したりすれば必然的にあふれてしまう。

この中学校が少なくしているのは、ストレス軽減策の一環という。ひいては、不登校に陥る生徒を減らす対策の一つなのだという。

「大人も同じですよ」と校長先生。大人社会もストレスはあふれ、悲しいかな心身の不調は身近なこととなった。宿題の削減は、大人で言えばワークライフバランスの充実だろうか。

7月のある日、神戸の小さな浜で5人くらいの小学生が遊んでいた。海にぶかぶか浮かんだり、釣りざおを垂らして海に目を凝らしたりしていた。

彼らに出された宿題が多いのかどうか知る由もない。どうしたって勉強しなくちゃならない夏もある。でも、自然と向き合

い、時にはけがもして、そういう外遊びでしか深められない経験がある。

夏は、夏休みだ。

この記事の中で紹介されている「西播磨地域にある中学校」とは本校のことです。ただし、本校は、「宿題は不要」と考えているわけではありません。今、子どもたちにとって、宿題は「自分の学力を向上させるための学習」から「提出しなければ怒られる」「提出しなければ成績(評定)が下がる」「期限通りに提出するための義務」に変わってきています。

宿題は、いつの間にか提出すること自体が最も大切な目的になってしまったのです。手段が目的になってしまったことで、子どもたちは、深く考えずに答えを写したり、機械的に空欄を埋めたりするだけの「作業」となり形骸化してしまいました。感想文やレポート・論文でもAIを利用した回答の丸写しが問題になることがあります。

もちろん宿題の目的を間違えないでできている子どももいます。ただし、大多数が間違えないで出ていけば問題になることなどないのです。

では、どうすれば子どもたちに形骸化させないで宿題をさせることができるでしょうか？

※一つ目は、子どもたちが主体的に学べるように大人が誘うことです。ただし、簡単に身につくなら苦労はありません。

※二つ目は、大人(保護者)の視野の範囲で取り組ませることです。しかし、自分もそうですが、なかなかわが子の宿題に毎日つきあうことなど出来るものではありません。

※三つ目は、学校の先生の前で宿題や課題をさせることです。

本校は、授業のDXにより、余白を創出し、できた余白で、授業中に宿題や課題に取り組みせようとしています。保護者の方の職場でも、PCが導入されたことで作業効率が上がったのと同じで、子どもたちに支給されている一人一台端末を授業で活用すれば、これまでと同じ内容でも時間が短縮され余

白が生まれます。子どもたちは、その余白で授業中に先生の支援を受けながら課題に取り組むことができます。結果的に家庭へ持ち帰る宿題の数は減ることになります。先生の手はこれまで以上に入っているということです。私は、校長として、先生たちの支援が行き届くことで、宿題は減るが、学校全体の学力が下がることなどあり得ないと考えています。

昭和・平成では、宿題を毎日たくさん出す先生がよい先生とされてきました。これからの時代は、授業中にDXによって余白を創出し、その余白で直接支援をしながら宿題や課題をさせる先生がよい先生になっていきます。つまり、宿題をたくさん出す先生が決して良い先生とは言えない時代が来たということです。(パラダイムシフト)

また、AIの利用についても、未来を生きる子どもたちには、AIの回答を丸写しするのではなく、まずは自分で考えることの大切さを教え、自分の思考の「相棒」としてAIを活用させ、AIの回答にはハルシネーション(AI特有のもっともらしいウソ)があることやファクトチェック(情報の裏どり)など様々なことを教える必要があります。来学期から本腰を入れて取り組む予定にしています。



生成AIの活用を通じた教育課題の解決・教育DXの加速・AIの利活用実践事例の創出・情報活用能力の育成など